

目次

兼好・光広筆跡……………三四

例言……………一

第一 段 つれづれなるままに……………一

第二 段 いでやこの世に生れては……………一

第三 段 いにしへの聖の御代の……………三

第四 段 よろづにいみじくとも……………四

第五 段 後の世の事……………四

第六 段 不幸に愁にしづめる人の……………四

第七 段 わが身のやんごとなからんにも……………五

第八 段 あだし野の露……………五

第九 段 世の人の心惑はず事……………六

第十 段 女は髪をめてだからんこそ……………七

第十一 段 家居の、つきづきしく……………八

第十二 段 神無月のころ……………九

第十三 段 同じ心ならん人と……………一〇

第十四 段 ひとり燈火のもとに……………一〇

第十五 段 和歌こそ……………一一

第十六 段 いづくにもあれ……………一二

第十七 段 神楽こそ……………一二

第十八 段 山寺にかきこもりて……………一四

第十九 段 人はおのれをつづまやかにし……………一四

第二十 段 折節の移りかはるこそ……………一五

第二十 段 なにがしとかやいひし世捨人の……………一九

第二十一 段 よろづのことは月見るにこそ……………一九

第二十二 段 何事も、古き世のみぞ……………二〇

第二十三 段 衰へたる末の世とはいへど……………二〇

第二十四 段 斎宮の野の宮に……………二二

第二十五 段 飛鳥川の淵瀬……………二二

第二十六 段 風も吹きあへず……………二四

第二十七 段 御国譲の節会……………二五

第二十八 段 諒闇の年ばかり……………二五

第二十九 段 静かに思へば……………二六

第三十 段 人のなきあそばかり……………二七

第三十一 段 雪のおもしろうふりたりし朝……………二八

第三十二 段 九月二十日のころ……………二八

第三十三 段 今の内裏造り出されて……………二九

第三十四 段 甲香は……………三〇

第三十五 段 手のわろき人の……………三〇

第三十六 段 久しくおとづれぬころ……………三〇

第三十七 段 朝夕へだてなくなれたる人の……………三二

第三十八 段 名利につかはれて……………三二

第三十九 段 ある人、法然上人に……………三三

第四十 段 因幡の国に……………三三

第四十一 段 五月五日、賀茂の競べ馬を……………三四

第四十二 段 唐橋ノ中將といふ人の子に……………三五

第四十三 段 春の暮つ方……………三六

第四十四 段 あやし竹の編戸の……………三七

第四十五 段 公世の二位の兄人に……………三六

第四十六 段 柳原の辺に……………三九

第四十七 段 ある人清水へ参りけるに……………三九

第四十八 段 光親の卿、院の最勝講奉行して……………四〇

第四十九 段 老来りて……………四〇

第五十 段 応長のころ伊勢の国より……………四一

第五十一 段 龜山殿の御池に……………四二

第五十二 段 仁和寺に、ある法師……………四三

第五十三 段 これも仁和寺の法師……………四四

第五十四 段 御室に、いみじき見の……………四五

第五十五 段 家の造りやうは……………四五

第五十六 段 久しく隔たりて……………四七

第五十七 段 人の語りいでたる歌物語の……………四七

第五十八 段 道心あらば……………四八

第五十九 段 大事を思ひ立たん人は……………四九

第六十 段 真乗院に、盛親僧都とて……………五〇

第六十一 段 御産の時……………五三

第六十二 段 延政門院……………五三

第六十三 段 後七日の阿闍梨……………五三

第六十四 段 車の五つ緒は……………五三

第六十五 段 このごろの冠は……………五三

第六十六 段 岡本の関白殿……………五四

第六十七 段 賀茂の岩本、橋本は……………五五

第六十八 段 筑紫に、なにがしの押領使……………五七

第六十九 段 書写の上人は……………五七

第七十 段 元応の清暑堂の御遊に……………五八

第七十一 段 名を聞くより……………五八

第七十二 段 いやしげなるもの……………五九

第七十三 段 世に語り伝ふる事……………六〇

第七十四 段 蟻のごとくに集まりて……………六一

第七十五 段 つれづれわぶる人は……………六一

第七十六 段 世の覚え花やかなるあたりに……………六二

第七十七 段 世の中に、そのころ人の……………六三

第七十八 段 今様のことどもの……………六三

第七十九 段 何事も入り立たぬ様……………六四

第八十 段 人ごとになが身に……………六四

第八十一 段 屏風障子などの……………六五

第八十二 段 うすものの表紙は……………六六

第八十三 段 竹林院の入道左大臣殿……………六七

第八十四 段 法顯三蔵の……………六七

第八十五 段 人の心すなほならねば……………六七

第八十六 段 惟継の中納言は……………六八

第八十七 段 下部に酒飲ます事は……………六九

第八十八 段 ある者、小野道風の書ける……………七一

第八十九 段 奥山に、猫またといふもの……………七二

第九十 段 大納言法印の……………七三

第九十一 段 赤舌日といふ事……………七三

第九十二 段 ある人、弓射る事を習ふに……………七四

第九十三 段 牛を売る者あり……………七五

第九十四 段 常磐井の相国……………七六

第九十五 段 箱のくりかたに……………七七

第九十六 段 めなもみといふ草……………七七

第九十七 段 その物に付きて……………七八

第九十八段 たふとき聖のいひ置きける……………七九

第九十九段 堀川の相国は……………七九

第一百段 久我の相国は……………七九

第一百一十段 ある人、任大臣の節会の……………八〇

第一百二段 尹ノ大納言光忠入道……………八〇

第一百三段 大覚寺殿にて……………八一

第一百四段 荒れたる宿の、人目無きに……………八一

第一百五段 北の屋かげに……………八二

第一百六段 高野の証空上人……………八三

第一百七段 女の物いひかけたる返事……………八三

第一百八段 寸陰惜しむ人なし……………八五

第一百九段 高名の木のぼり……………八六

第二百段 双六の上手といひし人に……………八七

第二百一段 困碁、双六好みて……………八八

第二百二段 明日は遠国へ……………八八

第二百三段 四十にも余りぬる人の……………八九

第二百四段 今出川のおほい殿……………八九

第二百五段 宿河原といふ所に……………九〇

第二百六段 寺院の号……………九一

第二百七段 友とするに……………九二

第二百八段 鯉のあつもの食ひたる日は……………九二

第二百九段 鎌倉の海に、かつをとといふ魚は……………九三

第二百十段 唐の物は……………九三

第二百十一段 養ひ銅ふ物には……………九四

第二百十二段 人の才能は……………九五

第二百十三段 無益のことをなして……………九五

第二百二十四段 是法法師は……………九六

第二百二十五段 人におくれて……………九六

第二百二十六段 博打の負けきはまりて……………九七

第二百二十七段 改めたる益なきことは……………九七

第二百二十八段 雅房の大納言は……………九七

第二百二十九段 顔回は……………九九

第二百三十段 物に争はず……………九九

第二百三十一段 貧しき者は……………一〇〇

第二百三十二段 鳥羽の作り道は……………一〇〇

第二百三十三段 夜の御殿は……………一〇一

第二百三十四段 高倉院の法華堂の三昧僧……………一〇二

第二百三十五段 資季の大納言入道……………一〇四

第二百三十六段 くすし篤成……………一〇五

第二百三十七段 花は盛り……………一〇五

第二百三十八段 祭過ぎぬれば……………一〇九

第二百三十九段 家にあきたき木は……………一一一

第二百四十段 身死して財残る事は……………一一三

第二百四十一段 悲田院の堯蓮上人は……………一一三

第二百四十二段 心無しと見ゆる者も……………一一五

第二百四十三段 人の終焉の有様の……………一一六

第二百四十四段 母の尾の上人……………一一六

第二百四十五段 御隨身奉の重躬……………一一七

第二百四十六段 明雲座主……………一一七

第二百四十七段 灸治あまた所になりぬれば……………一一八

第二百四十八段 四十以後の人……………一一八

第二百四十九段 鹿茸を鼻にあてて……………一二八

第二百五十段 能をつかんとする人……………一二九

第二百五十一段 ある人のいはい……………一二〇

第二百五十二段 西大寺の静然上人……………一二〇

第二百五十三段 為兼の大納言入道……………一二〇

第二百五十四段 この人、東寺の門に……………一二二

第二百五十五段 世にしたがはん人は……………一二三

第二百五十六段 大臣大饗は……………一二三

第二百五十七段 筆をとれば……………一二四

第二百五十八段 杯の底を捨つる事は……………一二四

第二百五十九段 みなむすびといふは……………一二五

第二百六十段 門に額掛くるを……………一二五

第二百六十一段 花の盛りは……………一二五

第二百六十二段 遍照寺の承仕法師……………一二六

第二百六十三段 太衝の太の字……………一二六

第二百六十四段 世の人相会ふ時……………一二六

第二百六十五段 あづまの人の……………一二七

第二百六十六段 人間の営みあへるわざを……………一二七

第二百六十七段 一道にたづさける人……………一二七

第二百六十八段 年老いたる人の……………一二九

第二百六十九段 何事の式といふ事は……………一二九

第二百七十段 さしたる事なくて……………一三〇

第二百七十一段 貝を覆ふ人の……………一三〇

第二百七十二段 若き時は……………一三〇

第二百七十三段 小野ノ小町が事……………一三一

第二百七十四段 小鷹によき犬……………一三一

第二百七十五段 世には心得ぬ事の……………一三三

第二百七十六段 黒戸は……………一三三

第二百七十七段 鎌倉の中書王にて……………一三六

第二百七十八段 ある所の侍ども……………一三七

第二百七十九段 入宋の沙門道眼上人……………一三七

第二百八十段 さぎちやうは……………一三八

第二百八十一段 ふれふれこゆき……………一三八

第二百八十二段 四条ノ大納言隆親ノ卿……………一三八

第二百八十三段 人つく牛をば……………一三九

第二百八十四段 相模ノ守時頼の母は……………一三九

第二百八十五段 城ノ陸奥ノ守泰盛は……………一四〇

第二百八十六段 吉田と申す馬乗りの……………一四〇

第二百八十七段 よろづの道の人……………一四一

第二百八十八段 ある者、子を法師になして……………一四二

第二百八十九段 けふはその事を……………一四三

第二百九十段 妻といふものこそ……………一四三

第二百九十一段 夜に入りて……………一四四

第二百九十二段 神仏にも、人のまうでぬ日……………一四四

第二百九十三段 くらき人の……………一四七

第二百九十四段 達人の人を見る眼は……………一四八

第二百九十五段 ある人、久我繩手を通りけるに……………一四九

第二百九十六段 東大寺の神輿……………一四九

第二百九十七段 諸寺の僧のみにもあらず……………一五〇

第二百九十八段 揚名の介に限らず……………一五〇

第二百九十九段 横川の行宣法印が……………一五〇

第二百百段 呉竹は葉細く……………一五一

第二百百一段 退凡下乗の卒都婆……………一五二

第二百十二段 十月を神無月といひて……………一五二

第二百十三段 勅勤の所に……………一五二

第二百十四段 犯人を管に……………一五三

第二百十五段 比叡山に、大師勸請の……………一五三

第二百十六段 徳大寺の故大臣殿……………一五三

第二百十七段 龜山殿建てられんとて……………一五三

第二百十八段 経文などの紐を結ふに……………一五四

第二百十九段 人の田を論ずるもの……………一五五

第二百二十段 喚子鳥は……………一五五

第二百二十一段 よろづの事は頼むべからず……………一五六

第二百二十二段 秋の月は……………一五六

第二百二十三段 御前の火炬に……………一五七

第二百二十四段 想夫恋といふ菜は……………一五七

第二百二十五段 平ノ宣時朝臣……………一五八

第二百二十六段 最明寺ノ入道……………一五九

第二百二十七段 ある大福長者のいはく……………一六〇

第二百二十八段 狐は人に……………一六一

第二百二十九段 四条ノ黄門……………一六一

第二百三十段 何事も刃土は……………一六一

第二百三十一段 建治、弘安のころは……………一六二

第二百三十二段 竹谷の乗願房……………一六二

第二百三十三段 たづのおほいどの……………一六三

第二百三十四段 陰陽師有宗入道……………一六三

第二百三十五段 多ノ久資が申しけるは……………一六六

第二百三十六段 後鳥羽院の御時……………一六六

第二百三十七段 六時礼讃は……………一六七

第二百二十八段 千本の釋迦念仏は……………一六六

第二百二十九段 よき細工は……………一六六

第二百三十段 五条ノ内裏には……………一六六

第二百三十一段 園の別当入道は……………一六六

第二百三十二段 すべて人は……………一七〇

第二百三十三段 よろづの物があらじと思はば……………一七〇

第二百三十四段 人の、物を問ひたるに……………一七三

第二百三十五段 主ある家には……………一七三

第二百三十六段 丹波に出雲といふ所……………一七三

第二百三十七段 柳箱に据うるものは……………一七四

第二百三十八段 御隨身近友が……………一七五

第二百三十九段 八月十五日、九月十三日は……………一七八

第二百四十段 しぶの浦の海人の見るめも……………一八〇

第二百四十一段 望月のまどかなる事は……………一八二

第二百四十二段 とこしなへに違順に……………一八三

第二百四十三段 八つなりし年……………一八三

系図……………一八四

官職・時刻方位図……………一八五

年表……………一八六

目次終り……………一八六

序 段

つれづれなるままに、日暮し硯すずりにか対ひて、心に映りゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

研 究

- 4 つれづれ草の著者として、
- 5 つぎのどれが適当であろう
- 6 か。その理由をもあわせ考
- 7 えてみよう。
- 8 (イ)卜部兼好 (ロ)吉
- 9 田兼好 (ハ)兼好法師
- 10

第 一 段

- 11 いでやこの世に生れて
- 12 は、願はしかるべき事こ
- 13 そ多かんめれ。御門の御
- 14 位はいとも畏し。竹の園
- 15 生の末葉まで、人間の種
- 16 ならぬぞやんごとなき。
- 17



舎人(隨身・番長)  
〔国立博物館蔵 隨身庭騎図〕

第一段 一 竹の園生―前漢孝文帝(前一五七崩)の子孝王の邸宅を竹園(チクエン)と言つた故事から、天皇の子(親王)の異名。末葉はその子すなわち天皇の孫で王。昔は王以下は皇族扱いはされなかった。

二 一人の御有様はさらなり。ただ人も、舍人など賜はるきははゆゆしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほとにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

法師ばかりうらやましからぬものはあら

じ。「人には木の端のやうに思はるるよ」

と、清少納言が書けるも、げにさることぞ

かし。勢猛に、ののしりたるにつけて、い

みじとは見えず。増賀ひじりのいひけんや

うに、名聞苦しく、仏の御教へに、たがふ

らんとぞ覚ゆる。ひたぶるの世捨人は、な

かなかあらまほしき方もありなん。

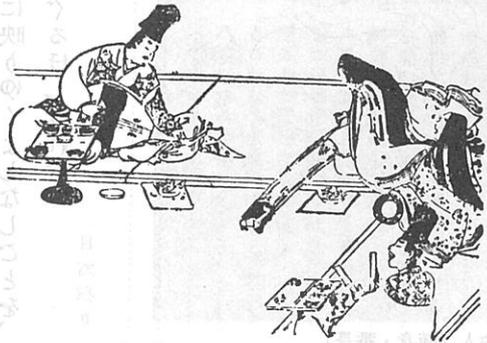
人は、貌有様のすぐれたらんこそあらま

ほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きに

くからず、愛敬ありて、言葉多からぬこそ、

あかず対はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるる本情見えんこそ、

くちをしかるべけれ。品貌こそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きに



管絃の遊び (鐵鬼草子)

三 舍人など賜はるきははゆゆしと見ゆ。延から特に優遇の意味で舍人たる家柄。当時は五摂家以外では西園寺(サイオンジ)家、徳大寺家等の家長がこの殊遇に浴した。舍人は近衛府の下級官なる番長・近衛等の総称。

四 清少納言―十世紀末、一条天皇の皇后定子に仕えた女性で、枕の草子の著者。人には「」の文も同書にある。

五 増賀ひじり―平安朝中期の学徳一世に高かった聖僧。奈良県多武峰(トウノミネ)に住したので多武峰の聖人(シヨウニン)といわれた。一〇〇三年寂、八十七。

六 まことしき文の道―本格的学問の意で、中国の経書(道徳書)の学問。

七 作文―中国の詩(漢詩)を作る事。文章を作るのではない。

八 有職―朝廷や貴族の間に昔から行われて来た官職制度その他ものろのきまりに関する知識。またそれに通じている事。

九 公事―朝廷の諸行事。

第二段

一 九条殿―右大臣藤原師輔(モロスケ)。村上天皇に仕えた権勢家で冷泉・円融二帝の外祖父。九六〇年没、五十三。

二 順徳院―一二一〇―一二二二在位の天皇。父後鳥羽(ゴトバ)上皇と共に北(ホウ)条氏討滅を企てて敗れ、一二二二年佐渡に崩御、四十六。著書に禁秘抄・八雲御抄がある。

三 おほやけの奉り物―天皇の御衣服の意。この文は禁秘抄にある。

も移さば移らざらん。貌心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品下り、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけおさるること、ほいなきわざなれ。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

第二段

いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民の愁へ、国的那こなはるるをも知らず、よろづに清らを尽していみじと思ひ、所狭ききましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬車に至るまで、あるに従ひて用ゐよ。美麗を求むる事なかれ」とぞ、九条殿の遺誠にも侍る。順徳院の、禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

研 究

1 この段は、当時の為政者に対し、質素儉約の政治を要望した文であるが、兼好がつれづれ草を執筆した当時の政治の責任者はだれであったか。また、その生活はどんなであったか。

2 全文の主旨を十字以内に要約せよ。